

いくつかの朝鮮古代地名の語源をめぐって

遠 藤 光 暁

1. はじめに

小文では「高句麗」と「百濟」をはじめとして「夫余」「新羅」「加耶」などの発音と語源について論ずる。これまでこうした国名は朝鮮半島ないし中国東北部にあることから、現在の民族が過去からそうした地域に居住していたことを前提として、その語源も論じられるのが通例であった。しかし、地域と国家と民族は重なり合うこともあるが、同一の概念ではない。更に言語に至っては、民族を識別する上での簡明な指標となるほど関わりは強いものの、国家や地域と一対一対応することはむしろ例外的である。またある地域がどのような国家や民族によって占められるかは時代によって異なるのが常態である。ここではそうした点をできる限り明確に区別しながら、語源を考えていくこととしたい。以下では中国の文献は「中國哲學書電子化計劃」のサイトから引用するが、その句読には必ずしも依らない。また特に必要な場合を除き、白鳥庫吉などの日本語論文で旧字体を使用している場合も当用漢字で引用する。

2. 「高句麗」の語源に関する先行説

「高句麗」の名称は早期には「高句驪」の字形で『漢書』に見え、「地理志」に県名として1例、「王莽伝」に5例現れる。馬偏が付くのは「地理志」に“玄菟、樂浪、武帝時置、皆朝鮮、濊、貉句驪蠻夷。”（玄菟郡と樂浪郡は武帝の時に置かれ、いずれも朝鮮・濊・貉句驪などの蛮夷である。）とあるように蛮族視したことによる。この文は「皆朝鮮、濊貉、句驪蠻夷。」と句読を付けるのが普通であるところ「貉句驪」とした理由は後で述べる。

白鳥（1896: 103-4）は「さるにても高句麗にて城を何と曰へりしや。『魏志』

卷三〇の同国伝に「溝漚者，句麗名城也。」と見えたり。而して高句麗の句麗は溝漚と音声は酷だ相似たれば，亦或は城の義にてもあるべきか。高句麗にても大をコといひしは，彼国の官名古雛加を，漢に大加と訳せるにて知らる。」ここから「高句麗」が「大城」の意味であるとする。

李（1980: 354-7）は白鳥（1896）の「句麗」の解釈には従うが，「高」は「高・上（首位）」を意味する韓国語の suri の訓読であり，全体の意味は「首邑・上邑」であり，それが都市名ないし国名に化したものと解釈している。

『漢書』『王莽伝』には「其更名高句麗為下句麗」とあり，『三国志』『烏丸鮮卑東夷伝』の高句麗条でも王莽が「布告天下，更名高句麗為下句麗。」と同じ記事が出ており，「高句麗」を貶めるために「高」を「下」に改めた。ここから，王莽はこの三字を第一字と第二・三字に分け，第一字の「高」を文字通り「高い」という意味に取っていたことが窺われる。また『三国志』東夷伝には「高」がつかない「句麗」だけの用例が頻出する。

田中（1995: 16）は岩佐（1936）が突厥碑文では高句麗を bökli と表記しており「貂句麗」の対音であろうとし，護（1977）がそれに対して bök eli「貂の国」と読むべきであろうとしたことを紹介している。なお，岩佐（1936）が「高句麗」と音声上完全には一致しない問題を提起していたが，この問題は護（1977）に至っても解決されていない。

ちなみに，護（1977, 1992: 156）には「砂漠（または平原）の国」を意味するという *čöl(l)ig el* について「私見を述べねばならぬが，与えられた紙数が尽きた」とあるが，その後の論文における詳しい論述を見いだせずにいる。Li（2017: 407）は“Čülüg el ‘realm/country of the Čü people’ (< Čü (< 周 Zhōu) + -lüg ‘suffix forming possessive noun/adjective’ + el ‘realm/country’)”と分析し，「北周」を指すとしている。

2. 「百濟」の国名との関係および「百」のチベット音からの啓示

『三国史記』『百濟本紀』には第一代の温祚王が夫余から現在のソウルの地に移住してきて建国したという建国神話が記されている。十人の家臣が助けたた

め「十濟」と初めは呼ばれ、のちに百姓が助けたため「百濟」と称するようになったとも記されている。ただし、『三国志』『烏丸鮮卑東夷伝』の韓条には「伯濟国」と記されている。高句麗の建国神話も同様にして夫余から移住し、兄弟国をなすものとされている。

『三国志』は3世紀半ばの文献であり、『三国史記』に基づくと百濟の建国は紀元前18年となり、高句麗の建国は紀元前37年となるが、田中（1995: 22）は紀元前107年から紀元前75年の間と見る。いずれにしても上古音の時代に属するが、一口に上古音といっても周から魏晉まで時間の幅が大きく、地域差もかなりあったはずである。ここでは上古音の音価として便宜的にBaxter and Sagart (2014) の推定音を参照して、議論を進めることとしたい。すると、「百・伯」は共に *pʰrak と推定されている。

一方、“百・八”のチベット文語の形 brgya と brgyat では g も含む子音連続となり、漢語の側でも『説文解字』は「穴」の声符を「八」としているので声母に牙音を含んでいるという内的な証拠がある。Baxter and Sagart (2014) は「八」の上古音として *pʰret を推定しているが、声母は pʰrkʰ-としてもよいはずである。

ここから「高句麗」「百濟」の名称が共に「𧇧」に由来する音声的な根拠が与えられる。

「𧇧」が『漢書』で「貉」と記されることは上引の例に既に出ているが、声符が「百～各」の交替を見せるので、*pʰrkʰak という上古音ないしシナチベット祖語音に遡ることが推定できる。つまり、この祖形から唇音声母を失った音価を「高句麗」の「高句」の二字が反映し、牙音を失った音価を「百濟」の「百」や「伯濟」の「伯」や突厥碑文の bök が反映すると考えることになる。あるいは漢代東北音ではまだ *pʰrkʰ- の子音連続を保存していたかもしれない。

ここで、「𧇧」が『廣韻』では「莫白切」で中古音の音韻地位は梗入陌明開二となり、明母となることが問題となる。あるいは「𧇧」はあまり現れない字なので、「陌」に類推して偏旁読みしたものであろうか。

3. 「高句麗」の「麗」の語源

「高句麗」の「高句」の2字が「貊」に相当するとするならば、残りの「麗」は何を表しているのだろうか。『後漢書』『東夷列伝』には「夷有九種、曰畎夷、于夷、方夷、黄夷、白夷、赤夷、玄夷、風夷、陽夷。故孔子欲居九夷也。」とあり、そのうちの「白夷」は高句麗の前身として、「白」は「貊」に該当し、「夷」の上古音は*lj̥であることから、「麗」はその音に由来する可能性がある。朝鮮半島の地名には「白」を含むものが多くあるが、それも「貊」に由来し、現在の朝鮮・韓国人の祖先に相当する。百済の最後の都・夫余を流れる白馬江も貊族の馬（これは別稿で論ずるが夫余の「馬加」に相当する「將軍」の意味）という語源に由来すると私は解釈している。

「麗」は通常は去声だが、「高句麗」の「麗」は『広韻』では支韻「呂支切」の小韻に入っており、『四声通解』でも「离」の小韻にあり、『翻訳老乞大・朴通事』でも陽平で、現代中国語でも gāogōulí と2声で発音し、「夷」と声調も合致する。

一方、「九夷」の一つ「于夷」は「濊」の前身に相当すると解釈できる。李(1995: 9-10)は河野六郎の濊倭同系説に対して二つの問題点を挙げており、その二つ目は新羅の郷歌に「倭」yayの訓が「倭理」と表記されており、*yariと推定されることである。その第二音節は「夷*lj̥」に相当するものと考えればよく、第一音節は「于」の上古音が*gʷ(r)aであり、これが「倭」に相当する可能性がある。

王(1999)は全体として青銅器の考古学的な根拠と文献史に基づき東北アジアから朝鮮半島・日本列島に至る濊族と貊族の興替過程を跡付けており、特に最後の第6～8章は圧巻である。それによると、

(以下は自由な要約部分) 紀元前1000年前後から前4世紀までは内蒙古東部に東胡人、遼西と遼河平野には貊人、遼東と朝鮮半島と第二松花江流域には濊人がいた。紀元前290年前後に燕の將軍の秦開が箕子朝鮮に攻め入り、箕子朝鮮は朝鮮半島方面に押し出されたことが細形銅劍の分布地域から窺われる。貊人の進入により、濊人の居住地域が後退し、また強い文化的影響を受けるよう

になった。漢代には夷を以て夷を治める政策により、楽浪郡の管理者もほとんど濊人であった。一方、辰国の「辰」は『説文解字』に「辰、震也。」とあるように中原の東にあると認識され、紀元前 1000 年季前半の朝鮮半島にあった古辰国は濊人の国であっただろう。紀元前 3 世紀初に細型銅剣・石槨墓などの青銅器文化が馬韓に入ってきた。箕子朝鮮と密接な関係を持っていた韓侯の国も紀元前 290 年前後に馬韓に入り、これが「韓」の名の由来である。また「馬韓」の「馬」は「𧇧」の明母読音による。秦役を逃れるために亡命した秦人たちが楽浪から辰韓に後漢桓靈（紀元後 147-190 年）の末に渡った。この 2 世紀頃から忠清北道を中心とする地域で中国の秦系の周溝土壙墓が作られ、秦式の丸底土鍋が出土するようになった。秦氏の祖である弓月の君はこの清州を中心とする地域から日本に移住した。濊人はすなわち倭人であった。（要約部分終わり）

一方、李（1995: 9）の濊倭同系説に対する第一の問題点とは、濊の言語が高句麗の言語とかけはなれたものであったり、少数集団の言語であったとすれば高句麗でそれが地名漢字の訓に使われることはなく、それは高句麗の中央の支配階級の間で長年にわたって形成されたもののはずだということであった。これについては、『三国史記』の区分による「高句麗」が実際に高句麗の版図になった歴史は短く、それ以前は西側は漢城百済、東側は濊の地域であったことから、濊語は百済の上層階級も含む多数者の言語であったのでなければならない、と言い換える必要がある。上引の王（1999）の所説によるならば、この第一の問題点に対しては、馬韓、特に錦江流域に𧇧人が入って来るまでは朝鮮半島は濊人の領域であった、として答えることが可能である。

これに関連して、遠藤（2023）の「於羅瑕」の解釈について補足をしておきたい。そこではこの語の最終音節が鮮卑語の「瑕（王）」であることから、「於羅」も鮮卑語の「国」を表す語であるものとした。これは所拠資料が 636 年成書の『周書』であり、中古期の資料なので、中古音で発音するものという先入観がまずあり、また李基文や河野六郎の百済の二重言語説が念頭にあり、いわゆる『三国史記』「高句麗」地名の地域では濊語が圧倒的に多いことから民衆は

満人であり、王族はそれ以外の民族である、と想定していたことも影響している。しかしながら、『周書』が記録したのは同時代の状況であるとは限らず、また同時代であったとしても百済漢字音は古風な特徴を保存していることが知られているから、「於」は上古魚部の音価 a であった可能性もあることになる。すると、「於羅」は「あ+ら」即ち「倭+場所」という語源を持っていた可能性もある。「倭」は和語の一人称代名詞に由来するとする説があり、それは「わ」と「あ」の二つの形で現れる。同じ語源によると見られる他の一連の地名などでも同様である。ここではそうした諸地名について詳論できないが、例えば加耶諸国の一つの「安羅あら」も同様の語源に依っていたと考えている。すると、王族語の「於羅瑕」は「倭+国+王」であった可能性が浮かび上がる。民衆語の「韃吉支」の「韃」も和語の「国くに」であった可能性が想定され、そうするとこれは階層差であって、二重言語を反映するとは限らないこととなる。

4. オーストロアジア語族などの「雑」

Trần Trí Dõi 教授は 2022 年 11 月 25 日にハノイの国立社会科学人文科学大学で行われた「言語学の研究と応用およびベトナム語学」国際会議での発表で東南アジア諸語において「人」を表す語に関する講演をし、翌年には地理分布も論じられた (Trần 2023)。そこで挙げられた例は以下の通り：

上古漢語： *p.rak, 雑; ベトナム漢字音 lạc; 早期中古音 puoak

クラ・ダイ語族： 侗水語派 la:k⁸; Tai Yay, luk, lu; タイ語 sa; ラオス語 kha
西南タイ祖語 *khraa A1

モン・クメール語族： Palaung-Wa, pəzaək, parauk, pʰalok; Khmú, rə:k, ha; nhóm
Việt, cmrawʔ; Arem, ʃruʔ, kari, kri; Mã Liêng; Bahnar Nam,
châu < *cmrawʔ, etc. Khmer, proh (man, male human); Bru,
bru

以上は現代語の音相はずいぶん異なり、頭子音だけ見ても p, l, r, k などが現れるが、私見によるならば、*prkak のような祖型に遡るものとしてよい。すると、「高句麗」の「高句」および「百済」の「百」もこの語に遡るものである可能性

が生じる。つまり、単に「人」を表す語であり、世界の様々の民族名が当該言語における「人」を表す単語に由来するのと同じこととなる。「百越」というのも越人が100種類いた地域というのではなく、「越人」という意味であった可能性もある（東南アジア諸語では修飾語が後ろから前に係る語順が多い）。果たしてそうであるならば、貊族のより早期の由来は東北アジアより更に南よりの長江流域であったのかもしれない。

5. 「夫余」の語源

高句麗・百濟は夫余から分出したという建国神話を持っており、夫余系国家とされる。その夫余は『三国志』「魏書」夫余条によると「以殷正月祭天。」（殷の正月に天を祭る。）とあるように殷代の遺風を留めていたとする記述がある。また『史記』伯夷列伝には「武王已平殷亂，天下宗周，而伯夷、叔齊恥之，義不食周粟，隱於首陽山，采薇而食之。」という有名な一段がある。この「伯夷・叔齊」はやはり修飾語が後ろから係る構造になっていることが明白であり、「夷の伯・齊の叔」と解される。中国には「首陽山」は甘肅省・河北省・山東省・河南省・山西省にあり、どこを指すのか決し難いが、いずれにしても殷の滅亡に伴い、夷族や齊人が離散したことを物語り、その一派が夫余に逃れた可能性はある。

夫余については『三国志』「魏書」夫余条に「多山陵、廣澤，於東夷之域最平敞。」（山嶺や広い沼沢が多く、東夷の地域では最も平らで広い。）とあり、中国東北地域では確かに夫余の位置したと見られる松嫩平原は最も広大な平野となっている。同上には「其印文言“濊王之印”，國有故城名濊城。蓋本濊貊之地，而夫餘王其中，自謂「亡人」，抑有似也。」（その印の文には「濊王の印」とあり、国には「濊城」という古城がある。恐らく元は濊貊の地であったところ、夫余がその中を統治するようになったものであり、自ら「流亡者」と称しているのもむべなるかなである。）とある。つまり、本来は濊人の国であったところ、夫余の統治者集団が外から入ってきた、というのである。『三国志』の地の文では「濊貊の地」と表現しているが、これは貊族が夫余地域に入ってきてから濊族と貊族が混住するようになってからの概念・用語と見られ、印文の「濊

王」と単独で称しているのが本来的なものと見るべきであり、ここの「濊貊」は「濊という貊（蛮族）の一派」と解する必要がある。

この記載と前節で引用した王（1999）の大局観からすると、「夫余」の国名は本来は濊語で命名されたものとすべきである。Baxter-Sagart（2014）によると上古音はそれぞれ「夫*[b]a, 餘*[l]a」であり、語義はこの国の特色である大きな平原に着目した和語*para（はら・原）に由来する可能性がある。

『後漢書』『東夷列伝』濊条の「自單單大嶺已東、沃沮、濊貊、悉屬樂浪。」（單單大嶺以東から沃沮と濊貊はことごとく樂浪郡に属する。）とある「單單大嶺」は太白山脈にあたるが、この「單單」は、『三国史記』『地理志』で「達」で表記される「高い」という意味と「岳」という二つの意味を表す濊語の「た」、即ち和語の「たか（高）」「たけ（岳）」に相当すると解釈できる。即ち「高い岳」の意味となる。遠藤（2022b）で見たように、『三国史記』に見える朝鮮半島地名では末尾音の脱落・弱化傾向が著しく、和語の taka や take に相当する単語は二つとも濊語では ta となっていて、それを表記する「達」の実際の発音も tat ではなく ta となっていたのだが、その状態を更に漢代に遡らせるならば「単」も -n が脱落して ta という音価であったと考え得る。現に、羅・周（1958: 73-75）では鄭玄や何休などの後漢の注釈家が記録した斉などの方音で -n の脱落などが窺われることを確認している。

『山海経』『海内北経』の有名な一節に「蓋國在鉅燕南、倭北。倭屬燕。」（蓋國は鉅燕の南、倭の北にある。倭は燕に属する。）とある。これらの地名の位置に関しては諸説あるが、王（1999: 254）は蓋國が朝鮮半島の北部にある蓋馬山であるとし、戦国晩期から前漢初期の倭（濊）の位置を示すものとしている。蓋馬山は現在は長白山とも言い、鴨緑江の発する白頭山を含み、その東側から豆満江が北に流れ、東に折れて現在の北朝鮮とロシアの国境線となって日本海に注ぐ。「蓋馬」という地名は『漢書』『三国志』『後漢書』に現れる。「蓋」の上古音は*[k]ʰap-s であり、-s は去声の標識なのでさしあたり除いて考えると、「蓋國」が二つの大河の間に位置することから、「蓋馬」は和語の kapa-ma（川＋間）に相当するものと解釈できる。

『三国史記』『地理志』は最後の部分に「總章二年二月」で始まる唐の高句麗出兵を指揮した李勣の奏文の出だしと勅文が引用され、その後に鴨緑江以北も含む地名が列挙されている。これは廬（2012: 178）によると、唐軍に呼応して新羅も667年に遼東戦線に派兵し、その際唐軍から新羅に伝えられた戦況報告が新羅朝廷で保管され、後に一部が掲載されたものだという。『三国史記』『地理志』の本体部分では統一新羅時代の版図の範囲しか地名の記録がなく、北緯39度近辺より北の情報が得られないので、これは貴重な資料である。そこには中国名の他に「本～」として高句麗地名が与えられているのだが、解説があまり進んでいなかった。Endo（2021: 36）では「居尸岬：心岳城」、「乃勿忽：鉦城」、「燕子忽：節城」、「骨尸岬：朽岳城」の4つを挙げておいたが、初めの2つはつとに指摘されていたものである。ただし、そのいずれの地名も井上（1986: 260-261）の訳注で現在の位置が明らかになっていないものばかりなのだが、「節城」については現在の黒龍江省の扶余市にあたる「北扶餘城州」の直後に配列され、その2つ後の「新城州」は遼寧省撫順市北関山城に比定されているので、その間にある可能性が高く、「末降城」の中にあるので唐に近い遼寧省よりではなく、現吉林省であったとしても黒龍江省よりの有力な都市であったと思われる。長春市か吉林市あたりであろうか。いずれにしても元は夫余の領域であったはずであり、「燕」が「夫」を受け継いだものならば夫余の都・吉林市となろう。

6. 「新羅」の語源

「新羅」の名称は『三国史記』『新羅本紀』智證麻立干四（503）年条に群臣が「始祖創業以来、國名未定、或稱斯羅、或稱斯盧、或言新羅。臣等以為新者德業日新、羅者網羅四方之義、則其為國號、宜矣。」（始祖が創業して以来、国名が定まっておらず、斯羅と称したり、斯盧と称したり、新羅と言っています。臣等は「新」が「德業が日々新たに」、「羅」が「四方を網羅する」という意味なので、それを国号とするのがよいと考えます。）と奏して決まったという。その背景には「新」が当時は「斯」と同音であり、韻尾がなかった（遠藤 2022b）ことがあるだろう。「羅」と「盧」の違いは、『三国志』では「斯盧」となってお

り、上古音では「斯」が*[s]e, 「廬」が*[r]aであったところ、上中古間で魚部の主母音が a > o の変化を経て、「廬」では a を表すのに相応しくなくなったため「羅」に変えたものであろう。漢字表記は三様あるがいずれも sila という発音であったと考えられる。

さて、その前身である「辰韓」や更に「辰国」の「辰」の上古音は*[d]æɾである。このように中古-n の韻尾の一部が上古 -r に遡るとというのが近年の上古音再構であり、それによって説明できる字音が日本最古期漢字音にかなりあることを遠藤（2022a）で例を挙げて論じた。「辰」の場合も、韻尾が-r であることから「斯廬」の前身である可能性が生じる。また意味上では、「辰」は東南東であり、三韓時代には辰韓は楽浪・帯方郡ないし辰王がいた月支国（現在の天安付近）から見て慶州が東南東の方角であるため命名したものと考えている。馬韓は「午」が南であり、弁韓は「弁」が「へび・巳」で、金官加耶は南南東に当たる。辰国の時代には起点が遼寧か燕であればそのままでもいいが、もし洛陽を起点とするならば前引の王（1999）が『説文解字』「辰，震也。」によって東側だとしたような操作が必要になる。

新羅の王の称号は『三国史記』によると「居西干・次次雄・尼師今・麻立干・王」のように変遷したことが知られている（<https://ja.wikipedia.org/wiki/赫居世居西干>, 2023/11/13 アクセス）：

1. 赫居世居西干（前 57-4）
2. 南解次次雄（4-24）
3. 儒理尼師今（24-57） / 4. 脱解尼師今（57-80） / 5. 婆娑尼師今（80-112） / 6. 祇摩尼師今（112-134） / 7. 逸聖尼師今（134-154） / 8. 阿達羅尼師今（154-184） / 9. 伐休尼師今（184-196） / 10. 奈解尼師今（196-230） / 11. 助賁尼師今（230-247） / 12. 沾解尼師今（247-261） / 13. 味鄒尼師今（262-284） / 14. 儒礼尼師今（284-298） / 15. 基臨尼師今（298-310） / 16. 訖解尼師今（310-356） / 17. 奈勿尼師今（356-402） / 18. 実聖尼師今（402-417） / 19. 訥祇麻立干（417-458） / 20. 慈悲麻立干（458-479） / 21. 炤知麻立干

(479-500) / 22. 智証麻立干 (500-514)

23. 法興王 (514-540) 以後は「王」

『三国遺事』では奈勿と実聖も麻立干としている。こうした称号には様々な語源説があるが、いずれも朝鮮語の立場から見たものとなる。しかしながら、新羅は4世紀末から5世紀初めの広開土王の侵攻を契機としてメタモルフォーゼを経ており、それ以降はオリエントの絢爛たる黄金文化に彩られるようになった(由水 2001, 2005, 山本監修 2009)。このような断絶を背景としつつ、以下のような語源説を立てることが可能である。

まず、「麻立干」の「干」が鮮卑語の王を表す qan であることは異論がない。その前の「麻立」については、鈴木 (1968: 140) が「「麻立干」はアラブ語の「王」を意味するマリク (malik) に通じる (ペルシャ語 malk, トルコ語 mélik)」と述べている。その場合、意味的に「王+王」となり、なぜわざわざ更に「王」の意味を付加したのかの説明が必要となる。一方、遠藤 (2022b) によると朝鮮三国を通して漢字音の末尾音を脱落させる例が多いので、「立」は末尾音を脱落させていたものとして、「麻立」で「mari, 馬」を表し、夫余の「馬加」のような騎馬軍団を司る將軍を表す可能性があると考えている。

それ以前の「尼師今」については、和語の「nishi, 西」と「kimi, 君」、つまり倭国の君から見ると西にいる君、という語源である可能性を提出しておきたい。『三国史記』には始祖・赫居世は本は倭人である、と書かれており、第4代の脱解も「本多婆那國所生也、其國在倭國東北一千里。」(もと多婆那(丹波か?) 国で生まれ、その国は倭国の東北千里にある。)とある。この辺の時代の記述は通常伝説時代として扱われているが、谷川・相馬 (2010) によると、『三国遺事』の「延烏郎・細烏女」という物語に AD 157 年に新羅から日本に行った夫婦がいて、そのときから新羅には太陽と月が消えてしまい、連れ戻したら太陽と月がもどったので、そこを「迎日県」または「都祈野」と名付けた話があり、紀元 158 年 7 月 13 日に慶州近辺で生じた日食がそれに相当するという。ちなみに、この「都祈野」の「都祈」は和語の「つき, 月」かもしれない。また「延烏

郎・細烏女」の「烏」は上古音では*q'a, crow, raven; black ないし*ʔ'a, 烏桓, 烏丸 Wūhuán: Avars (W.Hàn) であり, 「倭」に相当する可能性がある。

また Lee et al. (2022) は韓国全羅北道群山市の堂北里遺跡の AD5-7 世紀の甕棺墓の古人骨の全ゲノムを解析し, 現代の 102 名の蔚山市のゲノムの位置に重なり合うことを確認した。Lee et al. (2022: 592) の figure 3 の拡大図を更に拡大して観察すると分かるが, 現代蔚山人のゲノムは現代韓国人と現代日本人の領域にまたがっているのである。これは二重の意味で興味深く, 従来の核ゲノムの主成分分析では現代韓国人と現代日本人は近くには位置するが重なりあうことはなかったのだが, 蔚山人は遺伝的に両方にまたがる成分からなっていることが明らかになり, また堂北里遺跡の少なくとも 2 個体は現代日本人の領域に位置しているのである。甕棺墓は北部九州にも入ってきた墓制であるが, そこに入っていた古人骨ゲノムが共通の領域に位置することは, 単に墓制が文化として入っただけではなく, 人も入ってきた証左となる。一方, 蔚山は慶州にも至近であり, 辰韓の一部であった。

以上のような状況からすると, 4 世紀末から 5 世紀にかけて慶州では民衆層・上層・支配層が少なくとも 3 つの言語の異なる人類集団からなっていた可能性がある。そして, それ以後, 人類集団の入れ替えや言語の均一化が起り, 最終的には『三国史記』『地理志』の地名が改訂された景德 16 (757) 年の後に現在のような単一言語の状態になったものと思われる。

7. 「加耶」の語源

「韓」の上古音*[g]ar (state in the Korean peninsula; Three Kingdoms period) も近年になって韻尾が-n ではなく-r に改訂されて推定されるようになったものである。「耶」の上古音は再構されていない。すると, -r 韻尾であることから, 「加羅」の前身である可能性が生ずるが, この両者を音声的に繋ぐためには「韓」と「加」の頭子音の違いも説明しなければならない。

遠藤 (2022c) では調音位置を区別せずに清濁の通用関係の地図を作成したが, 実は牙喉音に関しては牙音同士の清濁通用例 (見母と群母, 少数の溪母)

いくつかの朝鮮古代地名の語源をめぐって



地図1 『三国史記』地名漢字音の牙喉音清濁通用例

および牙音・喉音間の清濁通用例（見母と匣母）があり、それを区別して表示すると地図1のようになる。

地図1では、赤丸が牙喉音清濁通用例、青斜線が牙音清濁通用例となる。『三国史記』による「百濟」地域に集中しており、これはいわゆる「百濟」地名が白

村江の戦いで唐軍が勝利した後に音声的な類似にもとづいて中国風の地名に改訂する際、朝鮮語を母語とする者が清濁の区別なしに用字を選んだことによるはずである。しかしながら、朝鮮漢字音では見母と群母が通用するのはよいとしても、匣母はhとなって区別されるので問題となる。河野（1964-1967, 1979: 359-360）では匣母がkで現れる例外を挙げているが、声符の類推によるものが大半である。これは新羅と百済の違いという地域的な差異か、現行の朝鮮漢字音の成立年代が百済漢字音よりも後になる時代的な差異か、あるいは両方の要因による可能性もある。

いずれにせよ、より古い時代の韓の漢字音では見母と匣母が通用することが確認されたので、「加（見母字）羅」が「韓（匣母字）」に由来するとして音声的に繋げることが可能になる。ただし、「加耶」や「加羅」の「加」は夫余の「六加」に由来し、それは鮮卑語の「王」を意味する qan, qayan の韻尾が脱落したものと見られる。「羅」は濊語で「ところ」を表し、「加羅」は「王国」という意味になる。王（1999）は、韓侯の国が紀元前 290 年前後に馬韓に入ったのが「韓」の名称の由来であるとしており、それが正しいならば「加羅」は後に加耶諸国が成立してから「王国」という語源解釈によって表記が書き換えられたことになろう。

忠清南道の瑞山に行ったとき、近くに「加耶山」があるので不思議に思った。「加耶山」は慶尚道海印寺の近くにあるものがよく知られていて、そちらは加耶諸国の範囲に位置している。だが、「加耶」の意味が「王国」であるならば、その地名の分布範囲は弁韓・加耶諸国の範囲に限られなくともよいこととなる。

また、「韓」は民族名ではなく地域名だということになり、その地域に居住していた人類集団は時代によって異なり得る。

8. おわりに

これまで朝鮮の地名・人名を扱う場合、それが現代と連続しているという先入観からの解釈がほとんどであったが、近年の遺伝学や考古学の認識からして人類集団の移動や言語の入れ替えが7世紀頃に至るまでドラスティックに生じ

たことが明らかになっている。それを背景として語源解釈もより広い視野から再検討すべき機運が高まっている。小文はそのささやかな試みの一つであった。

謝辞

本論文は青山学院大学経済研究所 2022 年度短期研究および科研費 18H05510, 23H00625 の研究成果の一部である。また 2022 年度は青山学院大学特別研究制度の適用を受けていた。

《参考文献》

- Baxter, William H. and Laurent Sagart. 2014 *Baxter-Sagart Old Chinese reconstruction*, version 1.1 (20 September 2014), <https://ocbaxtersagart.lsa.umich.edu/>, access: 12 Nov. 2023.
- Endo, Mitsuaki. 2021 Geographical distribution of certain toponyms in the *Samguk Sagi*, *Anthropological Science* 129 (1): 35-44. DOI: <https://doi.org/10.1537/ase.201229>
- 遠藤光暁 2022a 「中国語上古音の最近の推定から見た本邦最古の漢字音」『岩波講座世界歴史 6 中華世界の再編とユーラシア東部 4～8 世紀』, 290-291, 東京: 岩波書店。
- 遠藤光暁 2022b 「最古期日朝漢字音における末尾音の弱化・脱落」『青山経済論集』73 (4): 157-164。
- 遠藤光暁 2022c 「『三国史記』地名漢字の通用例に反映した清濁合流の地理分布」『経済研究』14: 59-69。
- 遠藤光暁 2023 「於羅瑕と韃吉支」『青山経済論集』74 (4): 33-56。
- 井上秀雄 1986 『三国史記』3, 東京: 平凡社。
- 岩佐精一郎 1936 「古突厥碑文の Bökli 及び Par Purm に就いて」『岩佐精一郎遺稿』, 61-76, 国会図書館デジタルコレクション。
- 河野六郎 1964-1967, 1979 「朝鮮漢字音の研究」『河野六郎著作集』2: 295-553, 東京: 平凡社。
- 李丙燾 1980 「高句麗国号考」『韓国古代史研究』345-360, 東京: 学生社。
- Lee, Don-Nyeong et al. 2022 Genomic detection of a secondary family burial in a single jar coffin in early Medieval Korea, *Am J Biol Anthropol.* 179: 585-597. DOI: 10.1002/ajpa.24650
- 李基文 1995 「『三国史記』に見える地名の解釈」『朝鮮文化研究』2: 1-11。
- Li, Yong-söng. 2017 On čwŭl (or čwŭgil) in the Kül tegin and Bilgä kagan inscriptions, In: *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hung.* 70 (4): 397-410. DOI: 10.1556/062.2017.70.4.2
- 羅常培・周祖謨 1958 『漢魏晉南北朝韻部演變研究』第一冊, 北京: 科学出版社。
- 護雅夫 1977 「いわゆる bökli について」『古代トルコ民族史研究』Ⅱ, 133-157, 東京: 山川出版社, 1992 年。
- 盧泰敦 2012 『古代朝鮮三国統一戦争史』, 東京: 岩波書店。
- 王建新 1999 『東北アジアの青銅器文化』, 東京: 同成社。
- 白鳥庫吉 1896 「高句麗の名称に就きての考」『白鳥庫吉全集』3: 99-106, 東京: 岩波書店, 1970 年。
- 鈴木治 1968 「徐羅伐異考」『朝鮮學報』48: 131-140。
- 田中俊明 1995 「高句麗とは」, 東潮・田中俊明『高句麗の歴史と遺跡』11-44, 東京: 中央

公論社。

谷川清隆, 相馬充 2010 『『天の磐戸』日食候補について』『国立天文台報』13 (3・4): 85-99。
Trần, Trí Dõi. 2023. The geographical distribution of autonyms for ‘person/people’ in the Mon-Khmer languages of South East Asia and its contribution to the understanding of the original location (homeland) of the Luòyuè residents. In: Trịnh Cẩm Lan, Trần Thị Hồng Hạnh, Hiroyuki Suzuki and Mitsuaki Endo (eds.) *Proceedings of the fifth International Conference on Asian Geolinguistics*, 1-11. DOI: <https://doi.org/10.5281/zenodo.83>

山本孝文監修 2009 『ユーラシアの風新羅へ』東京：山川出版社。

由水常雄 2001 『ローマ文化王国—新羅 改訂新版』東京：新潮社，2005 年。